
徒花（クルイザキ）

穿月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレイザキ
徒花

【Nコード】

N54010

【作者名】

穿月

【あらすじ】

人に仇なす無法者共く無志の蔓延る大倭帝國。そんな時代に鬼面の無志を追い続ける一人の青年がいた。彼は何を思い、何を求め、何を為すのか。

これは獣と修羅が織り成す愛憎と妄執の物語。ここには正義も無ければ大義も無い。あるのは純真無垢な狂気だけ。

血風に閃く刃は憎悪によってこそ研ぎ澄まされる
血で血を洗う暗黒活劇、ここに開幕。

開幕

まるで唾っているかのように口角を吊り上げた鬼の面。打ち捨てられたそれを拾い上げて顔へと運び、後頭部にて紐を結わえる。面は自分のために設えたかのようにしつくりと馴染んだ。

遠くから響いてくる複数の靴音が耳に届く。それが次第に近くなり、程なくして刀を手にした男達が視界に飛び込んできた。数は六つ。気配と身の熟こなしから推察される男達の力量は中の下といったところか。決して強くはないが、六対一という人数差はそれだけで十分な脅威になりうるだろう。

だから、どうだというのか。

避けられぬ戦いであり、避ける理由も無い。

刀を構え、目算で間合いを測る。

まだ、遠い。

彼我の距離は未だ刃の威力及ぶ内には無い。しかし、五感全てから伝わる敵の殺気は明確に濃密さを増し、激しく脳髓を刺激する。

麻薬にも等しい快楽となって全身を包み込むそれに身を委ね、甘美なる死戦の馨かおりに酔い痴れる。

「くっ……くく、くはっ……ははは……ははっ」

不意に声が、聞こえた。嬉しくて嬉しくて堪らない、そんな声音。どこからか意識を向ければ、それは紛れもなく己の口から発せられたものだった。

そして気付く。醜く唾う鬼面の下に同じくらい醜悪な貌をした鬼おのれがいることに。それは死戦に臨んで歓喜し、死と隣り合わせの緊張に快楽する、まさに修羅の貌かお。

だが、意外なことなど何も無い。己が何を望んでいるかなど、もう十分に理解しているのだから。

距離が詰まる。

間合いまで、あと二歩。

鼓動が昂り、血液が沸騰するような錯覚に心が沸き立つ。
あと、一歩。

脚に力を溜め、地を蹴る

一、帝國

極東に浮かぶ小さな島国、名を大倭帝國だいやまとていこくと言う。三度にわたる世界大戦を経験してなお他国の介入を退けた彼の国は今、侍の名を騙った辻斬りが横行し、武士の名を貶める殺人鬼が蔓延る暗黒の時代を迎えていた。

大義は無く志も無い、ただただ凶刃を振るって人に仇なす悪鬼共、奴等を人々は恐れ、憎み、侮蔑の意味を込めてこう呼んだ。無志ぶし、と。

彼の帝國にて、ある無志を追い続ける青年が一人

大通りを一本脇に逸れたその路地は、人通りもまばらで昼間でも薄暗く感じるような陰を帯びていた。

「も、申し訳ありません」

路地に響いたその声は年若い女のものだ。そして、声の方向には三つの人影が見える。

どうやら内二人は姉弟せいどうだいであるらしい。顔を真っ青にして震える少年とその少年に寄り添うようにして少女が立っている。

と、姉と思しきセーラー服姿の少女が道路に膝をつき、地に額を擦りつけるように頭を下げた。ランドセルを担いだ弟と思しき少年も慌ててそれに続く。

「どうか、どうかご容赦を」

弟の手前、気丈に振舞ってはいるものの、その少女もまた体の震えを隠しきれていない。

それも当然のこと。男の身なりはノータイワイシャツに上着と、

それこそヤクザ者やチンピラそのものといった様子だったが、その腰に差してあるものは紛れもない刀であった。そう、この男もまた無志なのだ。

“この世の中において無志ほど相手にしてはならないものはない。万一関わってしまったなら決して逆らうな。己が命が大事なら”

それが力を持たない無辜の人々の暗黙の了解。

必死に頭を下げて謝る二人であったが、しかし、無志と呼ばれるような人間がそれだけで満足するわけもなく。これ見よがしに舌を打ち鳴らし、苛立たしげな様子で二人を睨み付ける。

「それだけかあ？　　ったく、謝って済む問題じゃねえんだよなあ。

そのガキのせいで俺の大切な時計が滅茶苦茶になっちまったんだからよお」

男の足元には壊れた懐中時計が無惨にも転がっていた。文字盤は砕け、針は曲がり、歯車が飛び出している。

「べ、弁償を……」

男の機嫌次第ではいつ斬り捨てられてもおかしくはないこの状況。それならば弁償で済ませられる方がずっと安い。きっと少女もそう思っていただろう。しかし……

「そうか、弁償するんだな？　この時計は骨董品だ。アンティーク百万、即金で払ってもらおうか」

一般人の月収入平均が二万を越えないことを加味すれば、それがいかに法外な金額であるかは容易に想像していただけだろう。

「そんな……」

少女が悲鳴のような声を上げる。

「ああ、無理だったか？　ふん、それならそのガキにこいつの切れ味を体感してもらうことになるな」

男の手が柄へと伸びる。

「お願いします……！　わたしがなんでもしますから、弟の命はどう

か

少女の懇願に男は手を止め、頭から足の先までをゆっくりと舐めるように見た。

「いいだろう」

下卑た笑みを浮かべ、男は少女の細い腕へと手を伸ばす。

「あの……」

その時、控えめながらもよく通る声が割り込んだ。

声をかけたのは一人の青年。身長は成人男性の平均よりもやや高め。しかし、大柄なわけではなくむしろ線の細さが際立つ。頭の後ろで結んだ髪は肩よりやや下まで伸びており、中性的な顔立ちも合わさっていかにも優男といった印象を与える。加えて、足先から襟元まで隙なく正された衣服　ワイシャツにネクタイ、肩章のある開襟の上着とスラックス、そして短靴、それらは一見ただの正装にも見えるが、配色や装飾はむしろ帝國軍の礼装に近い　からは、育ちの良さも垣間見えた。

柔らかな微笑を湛えたその青年は見るからにヤクザ者である男と是对極にあるような見目であったが、その腰には男と同じく刀が見て取れた。長さはおよそ三尺。抜いて構えれば敵に並々ならぬ威圧感を与えるであろう。だが、その存在にも関わらず、青年には無志特有の周囲を威圧する雰囲気は皆無であった。

それが容姿によるものか、身を包む装いから来るものか、はたまた諸々を含めた青年の雰囲気のせいかは定かでない。しかし、恐らくは見てくれのみの護身用だろう、と周囲に思わせるほど、彼に刀は不似合いだった。

「すみません。少々失礼いたします」

男の足元へしゃがみ込む。何をしているのか思えば壊れた時計を拾い上げて眺めていた。

「この時計は貴方のものですか？」

「ああそうだ。ヒデエもんだろ」

「ええ、酷いものです」

青年のその言葉に男は笑みを深めた。やはり逆らえるものなどいないのだ、と。

しかし、それも青年の次の言葉で一変することになった。

「この程度の品で大金の弁償を要求するとは」

あろうことが青年の口から飛び出したのは男を否定する一言であった。

逆らえば殺されてしまうかもしれないのだから、如何に理不尽であろうとも素直に従うしか出来ないのだ。普通ならば。

だというのに青年は怖気づくことなく、それどころか刃向いさえした。

舐められている。恐らくはそう思ったのだろう。男の顔は憤怒に顔を歪めた。

「テメエ、喧嘩売ってんのか」

「私は事実をありのままに伝えただけですが。」

と、そう言えば、この界限には金品を脅し取る追剥まがいの無志が出るそう。なんでも最近の被害は懐中時計であったとか。身なりも聞いた覚えがありますね、確か……」

「チツ、その口を塞ぎやがれッ！」

青年が言い切る前に男の恫喝が飛ぶ。怒りに顔を歪ませて、男の右手は再び刀へと伸びた。

それにいち早く気付いた少女は次の瞬間に起こるであろう惨劇から弟を守るため、咄嗟に抱き締めて視界を遮った。自身も顔を逸らして目をきつく瞑る。

しかし、様子がおかしい。いつまで経っても何も聞こえないのだ。刃が肉を裂く嫌な音も、斬られた青年の断末魔も、何も。

少女が恐る恐る視線を上げて窺うと、そこには予想外の事態が広がっていた。

青年に柄頭を押さえられ、刀を抜くことさえまならなかった無志の姿。その男の眼前には触れるか触れないかのギリギリの位置で寸止めされた懐剣があった。目にも留まらぬ早業に当事者である男

でさえ何が起こったのか理解出来ていないようだ。

時間の経過と共に、己の置かれた状況がゆっくりと脳へと浸透しはじめたのだろう。見る見る内に男の顔から血の気が引き、仕舞いには真つ青になった。

「……ッ!？」

頬を引き攣らせ、声にならない声で叫ぶ。

命乞いの言葉一つ発せられずに硬直する男を尻目に、青年は姉弟へと振り返って告げた。

「その御二人、今の内に下がりなさい」

青年のその言葉で我に返った少女が少年の手を引いて走り去る。

折角の獲物が逃げていく、その様子を目にしながらも男は微動だにできなかった。青年の視線が男からほとんど外れていたにも関わらず、である。

眼前に凶器を突きつけられた恐怖のせいだけではない。否、むしろ男の動きを縛るものは別にあつた。それは尋常ではないほどの青年の殺気。それまでの優男然とした雰囲気が嘘のように禍々しい、全身を切り刻むような殺気を受けて男は瞬時に理解した。

動けば死ぬ、と。

失明など生ぬるい。もし反撃しようとなわずかにでも動いてしまつたなら、刃は速やかに眼球を穿つて頭蓋の内へと潜り込み、更にはその奥に存在する脳をも抉るだろう。

そんな想像さえしてしまふほどに青年から発せられるそれは鋭く研ぎ澄まされていた。

大した実力も無く、暴力を笠に弱者を虐げるしか能の無かつたこの男には、この状況を打破するだけの力も度胸も存在しなかつた。

少女と少年が離れきつたのを見届けた青年はゆっくりと男へ向き直る。そして、突きつけていた懐剣を収めて一歩退いた。

しかし、青年が離れて縛るものが何もなくなつたにも関わらず、男は金縛りにでもあつたかのように指一本動かすことが出来なかつた。距離を置いて尚、死をちらつかせる青年の殺気に囚われて、脳

が半ば本能的に体を動かすことを拒絶していた。

「さて、どうしますか？ このまま何も無かったとして去るのならよし。しかし、貴方が抜くのであれば、その時は……」

「ゆ、赦してくれ」

恐怖に慄きながら、男は搾り出すように答えた。その声は妖あやかしに怯える子供のように情けなく震えている。

「では、このまま引いて下されると、そういうことですね？」

青年の問いに男は千切れんばかりの勢いで首を縦に振る。

「ああ、良かった。貴方が刀を抜かずに引いてくださって、本当に

良かった。それが誰にとってのものであるかは言わずもがな、

だ。そう言つて微笑んだ青年の顔はまるで無理矢理貼り付けたかのように歪で、それは得体の知れない不気味さを帯びている。

「そういえば、貴方に一つだけ聞きしたいことがあります。鬼面の無志をご存知ありませんか？」

恐怖に打ち震える男へ、青年が思い出したように訊ねた。

「しっ、知らない……」

間髪入れずに答えた男の顔には一刻も早くこの場を逃れたいという思いがありありと浮かんでいる。

「本当に？ 嘘はいけませんよ？」

青年は男をじつと見つめる。さっきまでの作り物染みた笑みは消え、目は鋭く見開かれていた。まるで魂まで射抜くような苛烈な眼光。

嘘じゃない、と必死に訴える男をしばらくの間青年は見据えていたが、不意に表情を最初の優しげなものへと戻し、

「それならいいのです」

と、寸刻前の雰囲気や嘘のような人好きのする笑顔で頷いた。

そこでようやく男は気が付いた。青年が最初に現れた時と同じような唐突さで、男自身へと向けられていた殺気が消え去っていたことに。

途端、膝から力が抜けて立っていられなくなった男はずるずると

地面にへたり込んだ。

「大丈夫ですか？」

青年は気遣うように手を伸ばしたが、男は俺に構うなと言わんばかりに後退る。そして、覚束ない足でよろよろと立ち上がったかと思つと、倒こけつ転まろびつ走り去つて行つた。

男が逃げたことで事態の収束を察知し、遠巻きに様子を窺つていた通行人たちも散り散りに去つて行く。そして、青年もまた人通りに紛れるように姿を消したのだった。

後には何事もなかったかのように人々が行き来する通りだけが残された。

二、恩人

外での用事を終え、少女、七瀬和羽ななせ かずはは家路を急いでいた。なにせ、今日の夕方によりにもよって無志に目をつけられるという災難にあつたばかりだ。早く帰るに越したことはない。

家までもう少し。そんな時、彼女は呻くような声を微かに拾った。辺りを見回せば暗がり、壁に背を預けるように人影が寄りかかっている。

下手に近づくのは危険だ。やや離れた距離から目を凝らして様子を探る。

「あつ!!」

思わず声が漏れた。そこに居たのはつい先程彼女を助けた青年だったのだ。

苦しげに息を漏らす青年へ駆け寄る和羽。近づいて彼の状態を目の当たりにした彼女は息を呑んだ。

血に塗れた服と、一つ一つは浅いものの全身にわたる裂傷の数々。それは紛れもない切創。

刀とは斬ることに特化した武器である。真剣同士の戦闘で基本となる戦術は大別するなら二つ。一つは相手の隙を衝き、一刀で斬り伏せるもの。そしてもう一つは浅手を多く負わせて、その傷口からの出血多量による生命活動の停止、つまり失血死を狙うものだ。実際に、かつての合戦場において最も多かった死因は失血死だったと主張する人間もいるのである。

青年の負った傷は深さこそ大したものではなかったが、問題は数であった。一刻も早く出血を抑えなければ体力を消耗し、やがて死に至るだろう。

駆け寄る和羽に気付いて青年はおもむろに顔を上げた。

「貴女は、夕方の……」

そう言いかけた途中で力を失った膝が折れ、体勢を崩した。くずおれる青年を和羽は咄嗟に体を下に入れて支えた。

「……すみません」

「謝る力が残っているならもうちょっと気張りなさいよっ！」

これ以上出ないという限界まで力を振り絞る。ようやくのことで青年を起こして座らせ、和羽は大きく息を吐く。

改めて青年の姿を見て、和羽は頭を抱えた。

確かにこの青年は命の恩人だ。弟にとっても自分自身にとっても、もし無事なら御礼の一つも言いたいものだ、と、和羽自身そう思っていた。

が、この状況はいただけない。刀で斬りつけられた傷を全身に負っている人間に関わるなど碌なものではない。この様子からすると、恐らくは追手もかかっていることだろう。仮に助けたとしても、血の跡を辿られてしまえば一巻の終わり。このまま放っておくのが最も賢いということは和羽自身も重々承知している。しかし……

(でも、恩人を見捨てるなんて)

結局、考えるまでもなかったのだ。和羽は保身を優先できるほど器用でもなければ、恩人を見捨ててのうのうと暮らせるほど凶太くもないのだから。

(わたし、本当に馬鹿だなあ)

最早自身のみで立つことさえも儘ならなくなった青年に肩を貸しながら、和羽は己の要領の悪さに溜息を吐くのだった。

包丁が調子よくまな板を叩く音と、煮立った鍋が蓋を鳴らす音が小気味良く響いている。その音に導かれるようにして鬼柳仁の意識が現実へ押し上げられる。

「ん……………こじは……………」

目の前に広がる見慣れぬ天井をぼんやりと眺めながら頭を整理していく。しかし、記憶が断片的に足りないせいで今居るここがどこかまでは分からなかった。はつきりしているのは襲撃をなんとか振り切ったところまで。朦朧とする意識の中、誰かの声が聞こえた。そこで記憶は途切れている。

（あれは誰だったでしょうか。確か見覚えがあった筈……ん？）

そこで仁はようやく近くに人がいることに気がついた。まだ体は重いが起き上がれないほどではなく、ゆっくりと上半身を起こす。

すぐ隣にいたのは少年、仁が昨日助けた彼だった。

仁が声をかけようとしたところで、その少年が衣擦れの音に反応して振り返る。そして、仁が目を覚ましたことを見て取った彼は大きく目を見開き、次いで声を上げた。

「お姉ちゃん、お兄ちゃんがおきたよ！！」

その声で台所から響いていた音がパタリと止み、代わってパタパタと少し急いだような小走りの足音が響く。襖が開き、入ってきたのは和羽。彼女は体を起こしている仁を目にして立ち止まり、ほっとしたように大きく息を吐いた。

「良かった。目を覚ましたのね」

昨晚、朦朧とする意識の中で確かに聞いた声。暗がりではんやりとはあるが見た顔。彼女が助けてくれたのだということに仁はようやく思い出していた。

「ああ、貴女が助けてくださったのですね。ありがとうございます。私のような怪しい者にまで手を差し伸べて下さるとは、貴女は善い方ですね」

頭を下げ感謝を口にする。

「べつ、別に！ 先に助けてもらったのはわたしたちの方だし…… 恩人を見捨てるなんて後味の悪いこと出来なかっただけよ」

顔をそむけ、ぶつきらばうにそう言う和羽を仁が感心したように見つめる。居心地が悪そうに身じろぎして、結局、仁の視線に耐えられず和羽は振り返って訊いた。

「な、なによ」

「いえ、その謙虚な態度もまた好ましいな、と」

特に深い意味を込めたつもりもなかったのだらう。仁は気負った様子もなくさりりと云つてのけた。

「……っつ！？」

不意を衝かれて思わず絶句する和羽。そして、顔を赤らめながら何かを言いかけては止める奇行を数回繰り返して、結局何も言えずに恨めしげに仁を睨んだ。

しかし、仁は何故睨まれるのか理解できずに首を傾げるだけ。拳句の果てに助けを求めるように傍らの少年へと目を逸らす始末だ。

「朝食にします、貴方も粥くらいなら喉を通るでしょー！！」

誰を、とは言わないが誤魔化すように声を張らせてそう言い、和羽が立ち上がる。そして台所の方へと地を鳴らさんばかりの勢いで歩いていった。

そんな彼女の背を見つめながら、仁がポツリと呟く。

「私は彼女を怒らせてしまったのでしょうか？」

「きつとだいじょうぶだよ。お姉ちゃん、照れてただけだから」

仁を励まそうとするように少年が答えた。さすがに仁も少年の心配りには気が付いたのか、ありがとうございますと言ってその頭を撫でる。すると少年は少しばかりくすぐったそうにしながら、はにかむような笑みを浮かべた。

そうしているところへ和羽が少年を呼ぶ声が届いた。

「翼、運ぶから手伝って」

「あ、うん」

返事をして、少年、翼は名残惜しげにしながらも席を立つ。

しばらくすると益に朝食を乗せて二人が戻って来た。

「はい、これ。あんまり良いお米じゃないから味は保障しないけど」
そう云って青年の前に出されたのは白粥と漬物。体力がまだ戻りきっていない仁にはこれで十分、いや、むしろありがたいくらいだった。

「すみません。ご迷惑をおかけします」

「本当よ、助けてもらった恩が無かったら絶対に放っておいたんだから」

自分ばかりが翻弄されて狼狽しているのが悔しかった和羽は、仕返すかのようにそう言った。もちろん本気で言ったつもりなどまるで無かった。けれど、仁はそう思わなかったようだ。

「申し訳ありません。これ以上ご迷惑をお掛けしてしまう前にお暇させていただきます」

これに慌てたのは和羽で、慌てて仁を引き止めた。

「ちよつと、待ちなさいよ。別にすぐ出て行って言ってるわけじゃないんだから。せめて傷が塞がるくらいは居ていいわよ！」

しかし、仁はここに居ては迷惑がかかると言って彼女の言葉に従おうとしない。それがまるでここに居たくないと言っても言うかのように聞こえ、少しムツとしながら和羽は言った。

「こんな真昼間に出て行かれたらそれこそ迷惑だつての。わたしが匿ってたのが知られちゃうじゃない。それに怪我が治らない内に出て行かれて、もし捕まったり殺されたりしたら何のために助けたか分からなくなるもの。」

だから、わたしたちのことを思うなら治るまで安静にしてて」

確かに和羽の言う通りだ。

仁を襲った奴らが居所を探っている可能性は十分にある。もし、ここを出る姿を見られてしまえば和羽や翼にまで危害が及ぶ怖れはかなり高いだろう。そうであれば、陽が高く、誰だか一目瞭然の昼間よりも薄暗がり顔の判別がしにくい夜の方が出るには都合がよい。

それになにより、ここまで言われて厚意を無下にすることは返って無礼に当たる。ここは彼女の言う通りにお世話になっておこう。そう思い直し、仁は再び頭を下げた。

「すみません。では、お言葉に甘えさせていただきます」

それを見て和羽はほっと胸を撫で下ろした。そして、

「よろしい」

そう言つて優しく笑みを浮かべたのだった。

白粥の程よい塩気と舌を刺激する梅干の酸味。それらを黙々と味わつていた仁が唐突に箸を止めた。

「どうかされましたか？」

何か気になることでもあつたのか、時折ちらちらと様子を窺つていた和羽は不意打ち気味に向けられた質問に若干口籠もりながら、おずおずと訊ねた。

「応急処置くらいしか出来なかつたけど、大丈夫かなつて」

「いえ、それだけでも十分に助かりました。傷の方はどうかお気になさらず。慣れていきますから」

“慣れている”その言葉に和羽の顔がわずかに曇る。

「よくあることなの？」

「ええ。まあ、ここまでやられたのは久しぶりですが、怪我自体はよくあることです。手当てのおかげで失血も抑えられましたし、数日もすれば傷は塞がるでしょう」

仁が答えたところへ翼が口を挟む。

「お姉ちゃんはお兄ちゃんのことか心配なんだよ」

言つて、翼は和羽に確認するように首を傾けた。それに合わせて仁も訊ねるように和羽を見る。和羽は弟の予期せぬ行動に口籠らせていたが、しばらくして観念したかのように息を吐き、顔を逸らしてからそうよ、と零した。

「やっぱりね、と言わんばかりの顔で仁を見る翼。仁は頷き、ありがとございますと和羽に向けて微笑んだ。

「そうだわ。翼、このお兄ちゃんが家にいるっていうのは内緒よ。

誰にも言っちゃ駄目」

決まりが悪そうにしていた和羽が、あからさまに話を変えようと

翼に注意する。そんな和羽の意図に翼はもちろん気付くこともなく、「うん、分かった!」

子供らしい無邪気な笑みを満面に浮かべて、大きく頷いた。

「そう言えば聞いてなかったわね、名前。わたしは七瀬和羽、こっちが弟の翼よ」

すっかり調子を取り戻した様子の和羽が思い出したように訊ね、そして名乗る。

「……カズハ?」

それに、繰り返すように仁が零した。その顔にはわずかに驚きの色が見え隠れしていた。

「そうよ。和やわらく羽はねって書いて和羽かずは。それがどうかしたかしら?」和羽がそう説明して覗き込むように見つめていると、仁は何かを振り払うかのように頭を振ってすみませんと謝った。

「知り合いに同じ名の者がいたもので。ただそれだけの話なんです。ああ、遅れ馳せながら名乗らせてせていただくと、私は鬼柳仁きりゅうじんと申します」

「えっと、仁さんって呼べばいいかしら?」

「お好きなように呼んでいただいて構いませんよ」

和羽の問いに頷き、そう答えたところへ翼が仁兄ちゃん、と呼んだ。

「はい、なんですか? 翼君」

振り返って仁が訊ねる。

「お兄ちゃんができたみたいでうれしいな」

満面の笑みで喜ぶ翼を仁はさつきと同じように撫でる。そうしている姿はまるで本当の兄弟のようだ。

「あの、仁さん、もう一つ聞きたいことがあるんだけど」

最初こそ水を差すようで悪いと躊躇っていたが、待っていても埒が明かない。しびれを切らして和羽は訊ねた。

「なんですか、と和羽へ視線を向ける仁。」

「襲ってきた相手って?」

和羽が訊くと、ああそのことですか、と仁は得心いったように頷いた。

「無志の集団ですよ。人数は五人でした。四人はそれほどではなかったのですが、中に一人、恐ろしいまでの腕を持つ者がおりまして、きつと彼は私よりも強い。そのせいで久方振りに危うい目に遭いました。」

今ここに生きていられるのは偏ひとへに敵が狭い室内戦には慣れていなかったお蔭です。もし、彼らが限られた空間での戦闘をも想定していたなら生きていなかったでしょう」

生死に関わる事態を事もなさに言う仁。それとは対称的に和羽は申し訳無さそうな表情を見せた。

「その襲撃って、もしかするとわたしたちを助けたから……」

「断定は出来ませんよ。私は多くの無志に恨みを買っていますから仁は和羽の気を紛らわすつもりで言ったのだろうが、むしろ逆効果だったと言えよう。恨みを買っているという言葉に和羽の表情が更に暗く翳くらくらってしまった。」

「恨みって？」

「まあ、色々」と

何気なく訊ねた和羽だったが、仁はあまり突っ込んでほしくないのか笑みを浮かべて言葉を濁す。

それに気が付いた和羽は無理に話さなくてもいいと言って遮った。本心からそう言っているわけではないだろうが、話しながらないとを詮索するのは礼儀に反するという和羽なりの配慮だった。

「なににせよ、この町で無志に襲われたとしたら十中八九は花村組の奴よ。昨日わたしたちが絡まれてたのもその無志だし」

「そうなのですか……」

口元に手を当て、頭を俯かせて考え込む仁。そんな仁を置き去りにして、無志に絡まれた時のことを思い出した和羽の愚痴はなおも熱を増してゆく。

「それにしても……あー、思い出すだけで腹が立つ！ 昨日の奴、

自分がよそ見して勝手に翼にぶつかってきたのよ？ その拳句、自分で時計を踏み潰しておいて何が百万よ、いい加減にしるっての！

捲くし立てる和羽に驚いて俯かせていた顔を上げる仁。それが目に入ったのか和羽もしまったと後悔するような表情を浮かべ、次いで取り繕うように笑顔をつくった。

「あはは、ごめんごめん。つい熱くなっちゃったわ。

話を戻すけど、間違ってもやり返そうなんて思っちゃ駄目よ。命が惜しかったらね。実際、仁さんやられちゃってるじゃない」

片腕を組み、生徒を窺める先生のように人差し指を立てる。演技がかかったそれも彼女なりに空気を和ませるつもりだったのだろう。そのおかげか緊張していた場の空気が再び穏やかなものに戻った。

「返す言葉もないですね」

苦笑して返す仁を見届け、和羽が立ち上がった。

「さて、片付けるわよ。翼、持ってきて。仁さんは寝てなさい」

どうやら和羽は既に仁の行動を読めるようになったらしい。片付けくらいは手伝おうと腰を上げた仁に先んじて笑顔で釘を刺す。先手を打たれ仁は為す術もなく座り直した。

うん、と返事をして手伝いを始めた翼とその先にある和羽の後姿を仁はぼんやりと眺める。

仲良さげに片付ける二人を見ながら仁は思った。

（あの事件が無ければ、私もこんなふうに平穏な生活を送っていたのでしょうか？）

あの事件。

それは仁に、そして仁の家族に突如として降りかかった最悪の記憶。

まだ無志が日陰に隠れ住んでいた頃の話。無志が世に這い出てくる切っ掛けとなったとある事件の話

三、邂逅

稽古の一つに巻藁を用いた試斬というものがある。芯となる青竹は背骨と同様の強度を備え、これに畳表を巻きつけることで得られる感触は人体を斬る時のそれと酷似する。この試斬を正しく行えるようになれば人の首を落とすことさえ可能となるのだ。

目前の巻藁を敵と仮定し、集中を高める。左足を右足よりわずかに引いて、切っ先を喉の高さへ定め、構えた。いわゆる正眼の構え。視線の動き、呼吸の調子、足の運び、そしてこの空間そのものとも言える間。その全てへと神経を研ぎ澄ませ、相手が動き出す気配を読み取って先んじて刀を振りかぶる。同時に右足を踏み込んで上段から左袈裟に斬り下ろした。止まることなく刃を返し、逆袈裟で斬り上げ、次いで追い討ちをかけるように右袈裟で一閃。そして、左脇構えからの横胴で止めを刺す。

刀を振って血を払い、納刀。

目にも留まらぬ斬撃によって分割された巻藁が、ようやく時を思い出したように地面へと崩れた。

「ふう」

鬼柳仁は小さく息を吐いて緊張を解いた。そこへ、

「お見事」

不意打ちのようにつけられた声と手を叩く音。その声は可憐な音色でありながら、同時に野に生きる獣のような猛々しさが見え隠れしていた。

振り向きざまに刃を抜き放つ。声の主と思しき影は見過ごせぬほど近くにあった。

石堀に腰掛けた見知らぬ少女。先の鈴を転がしたような美しい音色が相応しい、見惚れるような麗しき見目の少女だ。

頭の後ろで束ねた髪は背の半ばで綺麗に揃えられており、濡れ羽色のそれが風に揺られてたなびく様は美しいの一言に尽きる。整っ

た顔立ちは匠の作り出した一級品の如く隙が無い。

そんな彼女を一言で表すなら“純真無垢”が適当だろうか。格好や容姿がそう思わせているのではない。むしろ彼女の出で立ちは少女というよりは少年のそれに近く、目鼻立ちも気の強そうな印象が勝っている。それでも見る者に可憐だと印象付けるのは、彼女の浮かべる笑顔が童女のように天真爛漫であることが大きな要因だろう。

一瞬、ありえる筈の無い既視感が仁の脳裏を過ぎった。が、それを気にしている場合ではない。即座に思考の隅へと追いやり、敵意に満ちた眼で少女を見据える。

仁に向けてひらひらと手を振る少女は仁の眼光に怯む気配も無く、花のような笑みを咲かせたままだ。

未だ半人前であることを自覚している仁だったが、それでも剣術に浸って久しい身。稽古に集中していたにしても、これほど近くまで寄られ、更には声をかけられるに至るまで気付けなかったなど、ありえないほどの失態だ。少女へと向かう視線が険しくなるのも頷ける。

「おお怖い。そんなに睨むなよ、こっちはか弱い女だぞ？」

そう言いながらも怖れているようには到底見え、戯けるような喋り方はどこか芝居がかっている。

「何者ですか？」

短く訊ねる仁には警戒を解く気配など微塵もない。

しかし、少女はそんな仁の態度を気にした様子も無く、両手を合わせ、思い出したように言った。

「ああ、そう言えば挨拶がまだだったな。すっかり失念していたよ。こんにちは、乃公おれの名前は狗飼いぬかい一刃かずは。数字の一に刃物の刃で一刃だ。まったく、およそ女子に付ける名ではないだろうよ。」

くつくつと声を抑えながら笑う。そんな彼女からは敵意も害意も全く感じられない。しかし、彼女が気配を感じさせることなく仁の背後を取ったのもまた紛れもない事実。そう簡単に気を許すことは出来なかった。

「そんなに身構えるなよ、乃公は丸腰だぞ？　なんならこの身を隅から隅まで調べてみるかい？」

にやりと邪悪な笑顔を浮かべながらそんなことをのたまう一刃。剣一筋で歩んできたせいかわずたじろいだ。絶句したまま口を魚のようにぱくぱくと開閉している様は滑稽そのものだ。

そんな仁の様子に一刃は満足したように笑みを深めた。

「ふふん、冗談さ。それにしても、そんなにいい反応を見せてくれるとはね。乃公はそんなに魅力的に映るかい？」

からかうような小悪魔的な声。仁は抗議するように険しい瞳で睨みつけた。

「あはは、巫山戯けるのはここまでにしておこう。大分緊張を解いてくれたようだしな」

その言葉で、少女の軽快な口調にいつのまにか引き込まれていたことに、そして自分がほとんど警戒を解いていたことに仁は今更ながら気付いた。

仁は刀を握りなおし、再び警戒を強めようとして………止めた。隙を衝いて何かする気があったなら先程の隙で十分事足りた筈である。それでありながら何もなかったというのなら、これ以上の警戒は無意味。そう判断した仁は上げかけていた切先を下ろし、鞘へと収めた。

「判つてくれて何よりだ。乃公はお前に会いたただけだからな、鬼柳宗家次期当主、鬼柳仁殿？」

満足したように頷き、一刃はそう言った。最後の方は疑問というよりは確認といった色が強く、以前から仁を知っていたらしいことが窺える。

「そう断じるには少々早計ですね。兄弟子には私よりも腕の立つ方が多くいらつしやる」

「ふふん、乃公はお前以外にはありえぬと思うがね」

どんな根拠があるのか、自身たっぷりに一刃はそう返した。

「買い被り過ぎですよ……ところで、貴女は私を知っているのですか？」

「もちろんだとも。と言つても、知っているのはほとんど名くらのものだがな。今日ここに來たのも、お前が如何なる人物かをこの目で確かめたかつたからさ」

純粹な興味というやつよ、と一刃は付け加えた。

そんな一刃を前に、仁は自分自身の抱いている意外な思いに気が付き、そして戸惑いを覚えた。

そもそも、鬼柳仁という人間は父以外からの評価を全くと言つていいほど気にしない性質だ。剣術も勉強も父に認められるためだけに取り組んできた。それは幼くして母の愛を失くしてしまったせいでもあり、厳格な父の教えの賜物でもある。

そうやって今まで生きてきた仁にとつての初めての例外。

他人という大まかな括りではない、狗飼一刃という一人の人間の目に自分がどう映っているかを確かめたい。そんな思いが仁の中に明確に存在していた。何故そう感じたのかは仁自身にも分からない。しかし、気付けば思うがままに疑問を口にしていた。

「それで、直に見たご感想は？」

それは、初めて他人に言つたであろう言葉であつた。

「うむ。乃公好みのなかなか良い男だ」

一瞬の間さえ無い即答。まるで仁がそう聞いてくると分かっていたかのようにわずかの躊躇さえ挟まない。そしてそれは同時に、躊躇いがないからこそ彼女の忌憚ない本心であることが窺い知れた。

「恐縮です」

傍目には至極冷静な態度でそう返した仁だったが、その心中は未だかつて感じたことのなかつた、心を揺さぶるような感覚に打ち震えていた。

「精進を怠るなよ。乃公の評価は厳しいぞ？」

仁の心の内を見透かしているように薄く笑みを浮かべ、一刃は言つた。

もしかすると実際に見抜かれているのかもしれないな、とそう思いながら仁は言葉の代わりに一つ頷く。

それを見て一刃は満足そうに笑みを深め、そして立ち上がった。

「さて、そろそろ帰るかな。ああ、そうだ。お前はいつもこの時間はここに居るのかね？」

「ええ、天候が悪い時や体調を崩した時を除けば」

仁は早朝のこの時間はいつも自主的に稽古をしている。随分前から続けている日課だ。隠す必要性も別段見当たらない。仁は特に隠すことなく素直に答えた。

「分かった。それじゃあまた明日な、仁」

手を一度だけ振って、扉の向こうへと消える。

誰もいない石堀の上に視線を残したまま、仁は一刃の正体に考えを巡らせた。わずかに脳裏を過ぎった既視感を思い起こす。

心当たりになるようなことは一つも無い。少なくとも仁の生活圏に関わりを持つ人物では無い筈だ。しかし、彼女もまた仁のことを知っているようだった。だとすれば　と、そこまで考えたところで仁は思考を打ち切った。

彼女が何者であるか。それを知ることにはどんな意味があるだろうか。既視感などただの思い過ごし。彼女が仁を知っていたのも風評を耳にしたと思えば十分の筈だ。大事なの一刃というあの少女が明日もまた来るということ。そう思いながら仁は踵かかとを返した。

「風変わりな女性だ」

変わっているとは感じさせても疎ましく思わせることはない、なんと不思議な人だった。空に浮かぶ雲のように唐突に現れ、掴み所がなく、まるで嵐のような激しさで仁の心を掻き乱して去っていった彼女。思い返してみても、どこか幻のように浮世離れた感覚が付き纏う。交わした言葉は決して多くはないが、それでもまた会いたいと、何故か仁はそう感じていた。

「また明日、ですか」

ぼつりとこぼす。それは誰の耳にも届くことなく空へと吸い込ま

れていった。

仁はまだ気付いていない。初対面の相手の明日も来るといふ言葉だけで、己が顔を綻ばせていたことなど。彼女との邂逅が彼自身にどれほどの影響を与えるかなど。

四、逢瀬

時間になると、どこからともなく現れる一刃。ほんの一言、二言だけ交わして去ってゆく日もあれば、時間の許す限り話し込む日もある。

それがまるで昔からのことのようになるまで、それほど時間はかからなかった。彼女はほとんど毎日現れ、仁もまた応えるように待つ。もはや一つの習慣だ。

そんな日々が続いたある日、一刃がいつに無く真剣な様子で仁に訊ねた。

「なあ仁。お前、乃公おれの為に一日空けることは出来るか？」

一刃が仁の前に初めて姿を現してからもうかれこれ半年は経つが、二人はただの一度も外で会ったことが無かった。それどころか、そういう会話になったことさえ無い。まるでここでしか会わないのが暗黙のルールのように二人は過ごしてきた。

それを唐突に破った一刃の行動に、疑問を抱かなかったと言えは嘘になる。だが、言葉にするのは憚られた。一刃の思い詰めたような瞳が仁にそうさせていた。

「父上かみが許すかどうかが問題ですが……」

一刃の顔が暗く曇る。

仁の父、数仁かずひとは非常に厳格な人物であり、一刃のことを知れば、素性の定かでない彼女と親しくすることを決して許しはしないだろう。だとすれば、取るべき方法は決まっていた。もともと嘘を吐くということが極端に苦手な仁にとって、それは剣で父に勝てと言われるよりも厳しく思える難題。しかし、一刃の存在は既に仁の中で大きくなりすぎていた。

落胆する彼女の表情かおを思い浮かべる。答えは一つだけだ。

「分かりました。どうにかしましょう」

仁の答えに一刃の顔が一転して華やぐ。それだけで、仁は己が選

んだ答えが間違いではなかったことを確信できた。

「期待しているぞ」

仁が言葉を返す前に扉の向こうへと彼女の姿が消えた。それを見届け、同時にこぼれる溜息。

「やれやれ、随分と参っているようですね、私は」

自嘲するような科白。しかし、それは決して後悔している声音ではなかった。

時は流れて約束の日。

苦勞の末、なんとか外出許可を得ることができた仁は一刀と示し合わせた場所へと足を運んでいた。

実のところ何のために呼び出されたのか、仁はまだ知らされていない。その理由に思考を巡らせてもみたが、生憎と見当をつけられるだけの経験が仁には無かった。

待ち合わせ場所はもう目の前。仁は自力で答えを出すことに見切りをつけ、一刀の姿を求めて辺りを見回す。

足が勝手に止まっていた。視界に映り込んで来た見慣れぬシルエツトは、けれど確かに彼女のものだ。

いつもズボンにTシャツという少年のような格好が常だった彼女が今日に限ってはスカートで、それとノースリーブのハイネックとの組み合わせは露出も多く、滑らかで無駄のない四肢が眩しい。薄らと施された化粧のせいかどこか艶めいて見える顔も、後頭部で束ねる代わりにそのまま真っ直ぐに下ろされた濡れ羽色の髪も、その全てが否応無く人目を惹きつけていた。

仁の姿に気付いた一刀が大きく手を振った。彼女ほどの容姿ともなれば、相手がどんな人間であるのかも気になるのだろう。一斉に集まる視線に仁は目深にかぶった野球帽を更に深くかぶりなおし、一刀の元へ足早に歩み寄った。

「勘弁してください。噂にでもなれば苦勞するのは私です」

額に冷や汗を浮かべて一刃へ詰め寄る仁。

「すまぬ、すまぬ。つい浮かれてしまったようだ。寛大な心で許せ」
謝っておきながらも全く悪びれた様子の無い一刃を前に、仁が諦めたように溜息を吐いた。

「はあ……ところで、今日は一体なんの為に？」

野暮な質問だ。しかし、それがまた如何にも仁らしいと言えら
しい。

「むう、お前は阿呆か。男と女が二人きりで出かけるのだぞ？ 逢
引以外に何がある」

呆れたようにそう返す一刃を前に仁は、え、と口を開けたまま固
まった。どうやら、全くの慮外であつたらしい。

「あ、あいびきですか？」

数秒の間を挟んでようやくそれだけ返した。その声はやはりぎこ
ちない。

「そう緊張するなよ。乃公だつて初めてさ」

仁とは対称的に、一刃には全く気負つた様子など無い。無防備に
立ち尽くす仁の腕にするりと己の腕を絡ませた。

「なっ!?! 一刃!」

柔らかな感触に焦つた仁が抗議の声を上げる。しかし、一刃はそ
れもどこ吹く風。絡ませた腕を解くどころか、さらに固く抱き締め
た。

「うむ、ようやく仁も解つてくれたか！ 名で呼び合うなど如何に
も恋人らしいではないか」

快活に笑つて、耳まで真っ赤に染めて絶句する仁を引きずるよう
に歩き出す。

仁にとっては随分と長い一日になりそうだ。

「片付けなど乃公が後でいくらでもするといふのに」

「いえ、ご相伴に預らせていただいたのです。これくらいは致しませんと」

どこにでもあるような集合住宅の中の一室。部屋は一つだけで、台所を含めても仁の家の最も小さい部屋ほどの広さしかないここは、一刃の住む家だ。

慣れぬことだったからだろうか。剣の稽古に比べれば全くもって大した運動量でもないのに、一刃に連れまわされて、気付けば仁はすっかり疲れ果てていた。そんな状態だったからかもしれない。いつの間にか一刃宅にて馳走に預かることを了承していた。

少しばかり大雑把なところがある一刃だが、どうやら料理にまではその気質は反映されならしい。舌に広がる味わいは繊細かつ美味で思わず目を瞠るほどであった。もちろん感想を求められた仁が余計なことを言って一刃に小突かれたのは言うまでもない。

そうして、今は食事を終えたところ。一刃を説き伏せて座らせた仁は代わって食器を洗っている。

「この堅物め」

「今さら気付いたのですか？」

「むむ、仁のくせに乃公に口答えをするとは小癪な」

一刃が背後から仁を抱き締める。仁は一瞬手を止めたものの、何事もなかったかのように食器洗いを再開した。さすがに一日中一刃に密着されていれば仁でも慣れてしまったようだ。

「危ないですよ。まだ終わっていません」

「……後回しにしておけ」

「一刃？」

窺うように名を呼ぶ仁を無視して一刃が訊ねる。

「食後の口直しに甘味はいかがかね？」

直前の巫山戯た雰囲気はどこへ行ったのか。ひどく艶めいた声音に仁の鼓動が煩いほど激しく脈打つ。

「甘いものは、苦手です」

辛うじてそれだけ言った。

返事はない。

静かに蛇口へと伸びた一刃の手がそつとつまみを捻る。水音が止み、静寂が部屋を満たした。

するりと仁の前へ回り込んだ一刃が彼の頬へと指を這わせる。言葉を失ってしまった仁の頬を撫でる白魚のような指。そのひんやりとした感触に仁は我に返つてわずかに身を引いた。しかし、一刃はそれさえ予期していたかのように体を寄せ、仁を追い詰める。更に縮まった距離は限りなく零に近い。

瞬間、一刃は体を預けるように仁へと身を投げ出し、そのまま寝台の上へ押し倒した。あまりにも出来過ぎな位置と絶妙なタイミングは、全で一刃の掌の上なのではないかと疑念を抱かせるほどだ。仰向けに倒れた仁に覆い被さるように一刃が四肢をつく。そして、耳元に口を寄せてそつと囁いた。

「据え膳食わぬは男の恥と言つが、お前は自ら恥を背負うのか？」
それは誘うような、挑むような、そんな声。言外に逃げたりする筈がないだろうと仁に訊ねていた。

「……それこそ、真逆まさかでしょう」
一刃の放つ妖しい気配に酔ってしまったのか、はたまた仁の中にある最後の矜持がはたらいたのか、それ以外の何かか。

一刃が目を閉じる。仁は彼女の細い腰を引き寄せ、その柔らかく瑞々しい唇へと口付けた。

始めは優しく穏やかに、やがて貪るように激しく。どれだけの時間が過ぎたか分からぬほど長い口付けを終え、どちらからとも無く離れた。

「言い訳は考えておけよ。夜はまだ長い」

「それは貴女が心配するようなことではありませんよ」

なおも挑発するような態度を崩さない一刃に仁が返す。ここまで来て引き下がる気など仁にも無い。覆い被さる一刃の肩を掴んで上下を入れ替えた。一転して組み敷かれるような形になったにも関わらず、一刃に怯んだ様子はまるで無い。それどころか娼婦のように

淫靡な笑みを浮かべ、一刃は言った。

「乃公を、乃公だけを見る、仁。その目に、心に、乃公を深く刻み込め」

麻薬だ。一刃は仁にとつての麻薬だった。決して手を出してはならぬ筈の、けれど、一度手を出せば二度とは逃れえない、禁断の果実。

それは狂おしいほど背徳的で、夢幻に堕ちていくように甘美な時間であった。

しかし、

違う。

何かが、決定的に違っている。

胸の中で常に渦巻く、消えることの無い違和感。

彼女が、一刃が悪いわけではない。

気の赴くままに街を巡って、他愛ないことに話を咲かせて。それは、これまでに無いほど穏やかな時間。

初めての経験だった。全てが新鮮で、楽しくなかったと言えばそれは嘘になる。こんな日が来ることなど無いと、そう思っていたのに。それほど温かなひと時。

けれども、違うのだ。

一刃と一緒にいることが苦痛だったわけではない。そんなことはありえない。

それでも、全くの無関係であつた筈なのに無理矢理舞台へと上げられてしまったかのような、そんな居心地の悪さが仁の中で燻っていた。肉体を重ねてなお埋めることのできない飢餓がまるで奈落に通じる穴のように仁の心の中で虚空の如き大口を開けていた。

だから、恐らくは違うのだ。穏やかな日常も温かなひと時も仁の正しい居場所ではない。甘い恋も深き愛も仁の胸に空いた虚無を満たしはしない。

その事実にも、仁は気付いた。気付いて……しまった。

耳をくすぐる衣擦れの音。ゆっくりと瞼を持ち上げる。そこには仁を見下ろすように見つめる一刃がいた。

「どうした？」

不意の問いに仁の肩が跳ねる。

「いえ、なんでもありません」

カラカラに渴いた喉から何とかそれだけを搾り出した。

「……………違和感、だろう？」

囁く声。澄んだ音色が仁の頭の中で反響する。

「或いは飢餓感か」

冷水を浴びせられたかと思った。凍てつく刃を心臓に突き刺されたかのように全身の血潮が熱を失ってゆく。

「……………あ」

何も言葉を返すことができない。仁はただ彼女を見つめ返した。

艶然と微笑み、一刃はゆっくりと仁に口付ける。

毒が流れ込む。思考を麻痺させる甘美な毒が全身へと廻ってゆく。

鉛のように重くなった仁の瞼にしなやかな指がそっと触れた。

「忘れるといい。今はまだ、いいんだ。おやすみ、仁」

意識が薄れる。現実との繋がりを失って、深く暗い深淵へと墜ちてゆく。抗う術をもたぬ仁は、流されるままに押し寄せる睡魔へとその身を任せた。

夢か現かも分からぬ微睡まひいみの中で、それは確かに仁の耳へ届いた。

「仁、やはり乃公の見立ては間違っていたよ。お前は乃公と同じだ。だから解るのさ、お前が何を求めているのか。」

大丈夫、大丈夫だ。乃公が満たしてやる。乃公はお前に心底惚れているのだからな」

五、鬼面

「それでは、また」

暇を告げる仁に、一刃は小さく手を振って応える。

扉を閉めようとする寸前、一刃が仁の首元を掴んで引き寄せた。重なる唇。それは一瞬のことで、柔らかな感触を味わう暇も、熱い吐息を感じる余裕も無い。触れたと思った次の瞬間には一刃は仁から離れ、何事も無かったかのよう微笑んでいた。

「またな」

一つ頷き、踵を返す。

これが、一刃を目にした最後であった。

一刃の家を後にした仁は、頭を悩ませていた。理由はもちろん、どんな言い訳をするか。さすがに泊りともなれば友人に口裏合わせを頼むことも難しい。無断で、ともなれば尚更だ。せめて日の昇る前にと早めに一刃の下を発ったものの、それでどうにかなるとは仁も思っていない。

どうしたものかと懊悩する仁だったが、道を塞ぐ柵に気がついて足を止めた。朝早いためにまだ開始されていないようだが工事からしく、柵の向こうには大型の重機も並んでいる。どうやら、ただでさえ不慣れな道であるのに考え事をしながら歩いたせいで通り抜け不可の看板を見逃してしまったらしい。

仕方がない、と迂回するために踵を返し方向を変えたその時だ。明らかに己へと向けられた鋭い殺気を感じ取り、仁は瞬時に身構えた。交差点の曲がり角からぬるりと姿を現す一つの人影。途端、仁へと向かう禍々しい殺気が更に強さを増した。

身長は仁よりも少しばかり低く、引き締まっていると言うには華

奢過ぎる身体。顔を覆う鬼面のせいで年の頃はおるか男女の判別もつかない。着流しを纏った姿はさながら幽鬼だ。

「無志、ですか」

無志の腰と右手にはそれぞれ鞘に納まった刀が一振りずつ。その内の一振り　右手に掴んでいた方だ　を仁へ向かって放り投げた。地を滑り、仁の足元まで転がって止まる。

まるでその刀を取って鬪えとでも言わんばかりの行為。いや、実際に誘っているのだらう、鬼面の無志は早く来いとばかりに待ち構えている。

剣術道場の長男として、仁は刃傷沙汰は極力避けねばならない。しかし、ここで刀を取らねば鬼柳家に対する汚名は決して避けられないだらう。相反する二つ。葛藤する仁を他所に無志は刃を抜き放った。

最早、迷ってなどいられなかった。降りかかる火の子は払わねばならない。

無志が投げて寄越した刀を拾い、抜刀する。長さはおよそ二尺三寸、反りは六分ほどであらうか。打刀としてはごく一般的な造りのそれは意外なほど仁の手に馴染んだ。

基本の型とも言える正眼に構える。それに合わせるように無志もまた構えた。

仁の正眼に対して無志のそれは下段。切先を地に触れそうなほど低く下げた構えは刀身が下を向いる分迫力に劣る。しかし、草むらに潜んで獲物を狙う肉食獣の如き異様な雰囲気が無志を中心に漂っていた。

彼我の間がじりじりと詰まり、ある距離まで近づいたところでピタリと止まった。

剣術において究極とも言える要素が間合である。基本となるのは一足一刀。これは一歩踏み込めば相手に打ち込める距離を指し、如何にして相手に気付かれぬ内に己の間合へと引き込むのか　間合を盗むのが勝敗を別つ。

二人が止まったのは、その一足一刀よりもわずかに遠い距離。実際には相手の間合や刀の長さ、体捌き等による打突の伸び、相手の構えなどの様々な要因によって間合は変化するため、まだ刀を交えていない状態では正確な距離を把握することは出来ない。

故に、明らかに刃の届かない位置で互いに踏み込む隙を探りながら二人は対峙している。互いが互いの間へと踏み込む好機を今か今かと探りながら。

たった一羽の鳥の囀り、それが合図であった。極限まで張り詰めた空気を破り仁が先手を取る。間合へと潜り込み、真っ向から刀を振り下ろす。天から地へと一直線の軌跡を描く刃には一寸の躊躇も無く、それ故に迅雷の如き速さで無志を襲う。

対する無志は仁の一刀に怯むことなく、真上から斬り下ろされる刃を下から半円二つを繋げた曲線を描くように摺り上げて外し、同時に振り上げた刀で以って反撃に転じた。

一瞬にして逆転する攻守。しかし、仁にも動じた様子は無く、後ろへと飛び退いて無志の一刀を紙一重で躲す。引いた仁に追い絶えるように無志は一步踏み込んで再び距離を詰める。そして、先の袈裟でもって振り下ろした刃を返し、逆袈裟で斬り上げた。

逆袈裟は下から上へと斬り上げる性質上勢いを欠きやすく、斬撃の威力は上からのそれに比べれば劣りがちだ。加えて、太刀筋が定まりにくいという欠点を抱えていることもあって致命傷を与えるには高い技術が必要不可欠である。ましてこの無志の細腕ではその威力、如何ばかりか。

いや、そう考えることこそ全くの傲慢であった。無志の一刀は自ら死合いを望むだけあって、仁の体を一瞬にして真っ二つに切断してしまいそんな鋭さを秘めていた。ただか細いのではない。無駄を排したその肉体からだがそう見えたとに過ぎないのだ。

右下方より迫る刃は十分すぎる殺傷能力を有している。生半可な守りでは刀諸共に斬り捨てられるだろう。そも、剣術には下からの斬撃に対する有効な防御手段が無い。故に逆袈裟は受け手にとって

捌き辛い一太刀であり、腕さえ伴えば有用な攻撃にもなりうるのだ。もちろん仁もそれを弁えている。無志の放った一撃を仁は無理に刀で受けようとはせず、絶妙な体捌きを以って躲し、無志の左側方へと回り込んだ。がら空きとなった無志の左腕目がけて鋼を斬り下ろす。側方からの攻撃に対し、無志は刀を引き寄せ、同時に仁へと向かって一步踏み出しながら鐔元で刃を受ける。

音を上げて競り合う刀。一步踏み込んで受けることにより、無志は斬撃の勢いを殺している。しかし、押し合いでは体格の勝る仁に分があった。競り合いが徐々に仁の優勢へと傾いてゆく。

不利を悟った無志が右足を軸に左足を引き回して姿勢を変え、仁の体勢を崩そうと刀を押しやった。押す力を流され揺らく体を仁はその強靱な足腰で支え、次なる斬撃に備えて刀を守りに構えた。間髪置かずに繰り出される無志の一撃を辛うじて受け流し、一旦距離を取って息を整える。

達人と呼ばれる者の中でもさらに一握りの人種だけが辿り着けるとされる領域がある。視線の揺らぎから呼吸の調子、筋肉のわずかな強張りにいたるまで、あらゆる変化の仔細を逃さぬほどに五感は研ぎ澄まされ、加速された知覚は流れる時に逆らうかの如く刹那を引き伸ばすというそれだ。仁は正しくその領域へ足を踏み入れていた。痺れるような緊張感と圧倒的な死の気配を前に極限まで高められた集中力が仁を至高の境地まで導いているのだ。

闘争を求める本能的な渴望。それに身を任せ、寸瞬で体勢を整えた仁は刀を構えなおして再び無志へと斬りかかった。

畳み掛けるように放たれる怒涛の連撃。しかし、その全ては悉く捌かれ、かすり傷の一つも与えられない。恐ろしいまでの技量を誇る無志だが、だからと言って仁が劣っているわけでは決していない。攻撃の隙を縫うように繰り出される無志の正確無比な反撃。それに捕らえられることなく鋭い斬撃を打ち込み続けている仁もまた並の技量ではないのだ。

目まぐるしく攻守を入れ替えながら、更なる苛烈さを見せる剣戟。

路地へと差し込む朝日が死戦に舞う二匹を照らし出す。それは演舞を髣髴とさせるようなある種の美しささえ帯びていた。

仁は気付いていない。敵を斬る、ただそれだけが彼の思考を支配しているが故に。彼を悩ませた違和感は既に消え去り、満たされぬ虚空が充ちていることに、彼は気付いていない。仁は、ただただ繰り返される刹那の攻防に胸を躍らせていた。

刹那の油断が生死を別つ死闘において、精神力の消耗は避けられない。長引けば長引くほど精細を欠き、判断力は鈍化し、やがて致命的な隙を生み出すことへと繋がる。それは仁と無志の二人においても例外ではなかった。

一進一退を極める激戦。だが、終わりは呆気ないほど唐突に訪れた。

「シィイツ!!」

右腕一本で仁が繰り出した突き。それを無志は蝶が風を読んで舞うように紙一重で躲し、そのまま懐へと潜り込んだ。伸びきった腕はもはや止めることも叶わない。この窮地でさえも逃れうる術が鬼柳剣術には存在する。左手で左腰に佩いた脇差を抜き打つのだ。惜しむらくは、今の仁に得物が一つしか無かいことである。そう、この状況において片手突きは二の太刀へ繋げることのできない、完全なる死手であった。

仁の左手が空を掴む。己が犯した致命的失敗にようやく気がついたが、既にどうしようもなく手遅れだ。無志の斬撃を地に倒れこむようにしてやり過ごすも、返す刃は既に目前。起き上がるよりも先に守りに入ることですべて辛うじて死は免れたものの、唯一の武器は仁の手から弾き飛ばされてしまった。舗装された路面を刀が滑り、乾いた音を立てる。

朝日を浴びて銀に輝く刃。しかし、それが仁を貫くことは無かった。

路地に響く固い音に仁が面おもてを上げる。そこにあつたのは刀を鞘へ収めて仁に背を向けた無志の姿。

「待て！」

背を向けたまま無志が振り返る。

嗤わらっていた。

面をかぶつた無志の表情を知りうる術は無く、声こゑが漏れ聞こえたわけでもない。けれども、分かるのだ。死闘を演じた仁だからこそ判る。見えざる嗤笑で、無言の哄笑で、憎ければ殺しに来いと、そう告げていた。

もはや無志を止めることは仁には叶わない。敗者たる仁はその権利を持ち得ぬ故に。

立ち去る無志は二度と振り返ることは無く、仁はその姿をただ見送るしかできなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5401o/>

徒花（クルイザキ）

2011年11月16日19時44分発行